

# 働き女子の夢をかなえるキャリアアップ講座

公開講座②佐々木かをりさん 講演会 11月19日(土)13:00~15:00

## 「キャリアビジョンを実現する時間管理術」

講師 佐々木 かをりさん (株式会社イー・ウーマン 代表取締役)

なぜ時間管理をしたいのか。それは自分が自分を動かしているという実感が欲しいからではないか。思い通りに時間を使った時、充実感があり、Happyな状態になっているのでは。

1人ひとりの大人は、「幸せになる権利」があるだけでなく、「自分を幸せにする責任」がある。責任は、日本語で言うと責められる係を任されるということ。みんな任せたくない。しかし英語では、責任=responsibilityで、response (対応する)とability (能力) =対応能力と考えると、少し響きが違う。自分を幸せにする対応能力をマスターしてほしい。落ち込んだ時に復活する方法をたくさん知ってほしい。

自分が幸せになるということを実践する人になると、社会にも貢献できる人になる。人生の主役は自分。そして、その人生の脚本家も自分。だから書き直しはいつでもできる。自分を予約し、予定を見える化し、時間を作り出す。時間管理を行うことで自分を幸せにしてほしい。



### 自分を予約する手帳の使い方(アクションプランナー術)

- ① 目的は自分をハッピーにすること
- ② 時間が見える手帳を選ぶ
- ③ 行動を面で書く(横線が重要!はみ出ない)
- ④ 情報を一元化する(仕事もプライベートも)
- ⑤ 移動時間も書く
- ⑥ 自分を予約する(読書でも何でも予定を書く)
- ⑦ やることをリスト化しない(時間の枠内に書く)
- ⑧ やりたいことは1年分自分へのアポを
- ⑨ いつも持ち歩く、いつも開く
- ⑩ 自分が脚本家(書き直しOK)

## 発表会/参加者交流会

発表会では、これまでの自分と、今の自分、3年後の自分がどう変化しているかのダイアログを元に、「夢をかなえるキャリアビジョン」を記入し、参加者それぞれが次のような自分の考えを発表しました。

- 部下やチームの教育やマネジメントができるようになりたい
- 職場でメンター制度をつくってほしい
- 10年後には、組織の中でポストを2ランク上げたい
- 小さな仕事でも、目の前の仕事を丁寧にこなしていきたい
- フォローアップセミナーで、いい報告ができるように今日からがんばってほしいと思う
- 上司に自分のキャリアビジョンを伝えて、目標を達成できるようにがんばってほしい

また、閉講式では、北橋市長からみなさんへの応援メッセージをいただきました。その後、参加者交流会があり、ムーブ特製の名刺を交換しながら、相互に交流を深めました。



参加者用名刺を作成し、活用してもらいました。



### 受講者の声



とても前向きになれる講座でした。参加された皆さんは仕事に対する意識が高く、一緒に学べたことが刺激となりました。最終的に発表したキャリアビジョンを実現するためにも、私自身積極的に仕事に取り組んでまいります。  
坂本 奈央さん  
リコーテクノシステムズ株式会社



日々「忙しい」という言葉を言い訳に曖昧にしてきた今の自分の「立ち位置」と、今後のなりたい自分の姿を思い描くことができました。現実逃避をせず、多くの人々とかかわりながら、組織と自身の「Happy」を目指していきたいと思えます。  
吉原 克実さん  
株式会社安川電機

## 特集

# 次世代女性リーダー

## 変化の時代と女性リーダー

たかみ まちこ  
高見 真智子  
有限会社  
サイズ・コミュニケーションズ  
代表取締役  
働き女子の夢をかなえる  
キャリアアップ講座のコー  
ディネーターとしてすべて  
の講座にかかわる。



同じ属性の人材が集まる単一文化では、変化に対応していくための新しいアイデアが生まれにくい。変化に対応するために、組織は女性をはじめ、多様な人材を活用する必要性に迫られている。国内では、女性活躍推進や女性リーダー開発の動きが顕在化しているものの課題も多い。

### 企業内の女性リーダーは増加しているのか？

国内の管理職における女性比率の変化を2003年と2010年でみると、課長相当職では、4.6%から7.0%、部長相当職では2.4%から4.2%と、わずかながら変化が見える。しかし取締役における女性の割合はまだ1.4%程度であり、ノルウェーの44.2%と比べると大きな開きがある。周知の通り、第3次男女共同参画基本計画のみならず、新成長戦略においても日本経済の成長を支える女性就労促進とそのためポジティブアクションの推進・強化が明示されている。国や地域、そして組織の活力を生み出す源泉として女性の役割を拡大していくことは喫緊の課題である。

### 女性リーダー育成の課題

次に女性リーダーの育成やプレゼンスの向上のために、私が重要と感じる課題を3点提示したい。

1つ目の課題は、リーダーやリーダーシップに対する正しい理解である。リーダーとなることに積極的な女性が増加する一方で、「女性リーダーは必要だが、自分はリーダーになれない」という層も、未だ存在する。この背景にはリーダーシップやリーダーへの認識不足もあるようだ。そもそもリーダーシップとは何だろうか？端的に言うと、人や集団をやる気にして動かし、成果を出していくことである。加えてそのリーダーには、多様なスタイルが存在する。しかし、リーダーという言葉にアレルギーを持つ女性は、「強く有能なリーダー像」を描いていることが多い。自分とかけ離れたイメージを描くほど、自らがリーダーになることに抵抗を感じてしまうわけだ。

ある調査によると、以前は「俺についてこいタイプ」のハードなリーダーシップが主流であったが、90年代以降は、

「一緒に考えようタイプ」のソフトなリーダーシップが成果を上げているという。自分の強みを核としながら状況や対象ごとに働きかけを調整する。そう考えると、自分のリーダーとしての可能性に気づけることも多い。

2つ目は、リーダーとして成果を上げていくための習慣とスキルの獲得である。創造的問題解決や対人影響力等のスキル開発も重要であるが、まずはリーダーとしてふさわしい「ものの見方」や「習慣」を身につけることが肝要だ。例えば課題を他責化せず、自分なりのアクションを模索すること、柔軟かつ現実的に物事を見ること等、スキル以前の「ものの見方」や「習慣」がリーダーとしての基盤となるのだ。

そして3つ目は経験の機会の提供である。人事担当者に女性の管理職が少ない理由を聞くと「リーダーとしての能力や経験等の要件を満たす人材がない」との回答が目立つが、その裏には、資質ではなく経験や育成のプロセスに男女間の違いが存在していることが多い。つまり、社内の役割やキャリアパスに女性は偏りがあり、結果としてリーダーシップを育む経験や、必要な能力や要件を得る機会が限定されているのだ。組織の活性化を考えるのであれば、男女の属性により生じている暗黙のキャリアパスや育成面等、人事システムにまで踏み込み、改善をしていく必要がある。

「日本において女性は最も活用されていない資源だ」と言う専門家も存在する。女性リーダーの増加は、個人のキャリアの選択肢を拡げるだけでなく、組織や地域の活力の源泉ともなり得る。このムーブ主催の「働き女子の夢をかなえるキャリアアップ講座」参加者のリーダーとしての活躍は、組織のみならず地域の力になると確信している。

今後も微力ながら彼女たちにエールを送り続けたい。

出典 厚生労働省『賃金構成基本統計調査』平成23年版  
国際女性経営幹部協会

# 日本の次世代リーダー



日本の次世代リーダー養成塾 事務局長 **かとう あきこ**  
**加藤 暁子**

1982年、毎日新聞に入社、福岡総局、東京本社経済部、外信部を経て香港特派員。退社後、慶応義塾大学研究員、早稲田大学客員研究員などを経て現職。4月からNPO法人九州アジア経営塾アドバイザーも兼任。

## 女性たちよ、大志を抱いて外に出でよ!

最近、日本の若者が内向きになっていると言われている。本当にそうだろうか。全国の高校生160人を選抜して毎夏2週間、福岡県宗像市のグローバルアリーナで「日本の次世代リーダー養成塾」を開催している。昨年は、留学をしたいかどうかを作文で書かせたが、約9割の高校生が「留学したい」と答えた。

作文を紹介すると、「医者になりたいが、手術が経験できる例は米国の方が多いので留学したい」「有田焼を世にもっと広めるためには、まず海外に留学して、世界の人々と知り合って地元をいかに活性化できるかを学びたい」「歴史の先生になりたいが、日本の立場から見た日本の歴史しか知らないより、外国から見た日本を知った方がより深く教えられる」「難病で苦しんでいる人々を助けるために薬を作りたい。研究開発の進んだ外国で学びたい」。

以上のような、具体的な理由があって留学をしたいと語ってくれたのはすべて女子高生である。もちろん夢を持っている男子高生も多くいるが、女子高生の方がより具体的な目標を定めている子が多かった。それに引き換え、男子の中には「海外は治安が悪い」ことを挙げて、留学したくないという意見も複数いたのが印象的だった。

私は、このリーダー塾を主宰して常々感じるのだが、子どもたちの行動を制限しているのは親ではないかということだ。昨年塾生に対して行った生活実態調査でも「親が干渉しすぎると思うかどうか」の問いに「よくある」が12%、「少しある」が38%と半分の高校生が親の干渉しすぎを感じている。

日本から米国への留学者数は1990年代終わりに47,000人をピークに2008年には30,000人を下回った。フルブライト・ジャパンのデビット・H.サターホワイト事務局長は「中国や韓国では小学生から英語を教えていて、飛躍的に英語力が上がっている。日本ではJETプログラムなどが導入されて久しいが、英語力は上がっていない。もっと英語を使うことでキャリアが広がるという

観点で学んでほしいし、若い人にはどんどん留学してほしい」とリーダー塾生たちにアドバイスしていただいた。

英語力という観点からいうと、日本での英語教育に問題があると感じる。中学から高校まで6年間、その後大学で学べば10年間は英語を学んでいる。しかし、誰しもが苦手感をぬぐい去れない。文法を間違えることにある種の恐怖を感じているといっても過言ではない。もっと、英語を楽しむながら学べることはできないのだろうか。

高校生たちには、まず、好きな分野のことを英語で読んでみてはどうかと勧めている。たとえば、ファッションが好きなら英字紙のファッションの記事を毎日必ず読む。サッカーが好きならサッカーの記事を欠かさず読む。好きなものなら辞書を引いても読んでみようというモチベーションが上がるはずだ。

ところで、海外に行くと、様々な都市で日本人女性が活躍していることは本当に嬉しいことだ。結婚して仕事をしている人も多くいるが、単身、その国に行って、地元採用で就職している人が年々増えているように感じる。海外で自分の能力を試している姿は頼もしい。

しかし、その反面、なぜ、優秀な人材を日本国内で活用できないのかという疑問もわく。自分のやりたい仕事と会社が与える仕事にギャップがあり、夢の実現を求めて海外に飛び出すケースも多いのではないかと。女性の役員登用も含め、国内の環境整備も急がないといけない。

1人ひとりの女性にとって、キャリアを積み上げていくことは大変なことだと思う。それには、まず、10年、20年先の目標に向かって、毎日の積み重ねをしていくことだ。

そのために海外の大学や大学院で学ぶことが必要だと思うのであれば迷わず、今日から勉強すべきだ。海外で就職することが将来の夢の実現に近道と思えば、外に向かって打って出るべきだ。

自分の人生のミッションとは何か、年が改まって考えるいいチャンス到来である。人生は1度きりだ。悔いのない生き方をしたいと自分にもいつも言い聞かせている。



栗城 史多さん 講演会

## 命について語る ～限界という壁を越えて～

11月9日(水) 18:30~20:00 ムーブ2階ホール



学生時代から登山を始め、6大陸の最高峰を単独で登り、今は、8,000m峰の山を単独・無酸素で挑戦し続ける栗城さんに、夢を実現するための想いを、雪山や登山の映像も織り交ぜ語っていただきました。500人の会場に1,000人以上の応募がありました。

### 登山をはじめた背景

偶然のきっかけで大学の山岳部に入部し、山を登り始める。始めは山が嫌いだったが、厳しい冬の縦走や登攀での経験を通して、「できる、できないは自分が作っている幻想だ」と気付かされ、試練の先にある美しい世界を見つけた。



### インターネット生中継をはじめたきっかけ

自分が登山に行ったことを、まわりの人たちに話しても伝わらない。冒険家の孤独をずっと味わっていたが、チョ・オユー登山(8,201m)の際、テレビ局から声をかけられ、インターネット配信を始めた。

### 登山でわかった苦しみの特徴

苦しみに対して、戦おうと思えば思うほど相手は増幅していく。苦しみは逃げても追いかけてくる。しかし、自分が気づかなかったことを発見できたり、成長のもとになる。最後は苦しみを友達と思い感謝して登るしかない。

苦しみは必ず喜びに変わる。何か目標に突き進んでいるうちの苦しみは苦しみではない。あんなに苦しかったから、喜びに変わる。

### 夢を実現するための想い

自分の夢や目標を声に出し続けることが大切。夢は1人では実現できない。多くの人の支えや応援があって、初めて実現できる。

来年、秋に4回目となる単独・無酸素でエベレストへ挑戦!

### 北九州市立大学の学生のインタビュー

**Q** 「感謝」という言葉をよく使われていますが、その気持ちはどこから来るのですか。

**A** 山では、1カ月以上、コンビニもなく、街の明かりもない。ごはんが普通に食べられたりする当たり前のことが、実は当たり前ではないと気づかされた。自分は周りの人に生かされているのだと気づいて、感謝できるようになった。

**Q** 私たち学生も進路や就職など、人生の分岐点で男女の固定的な役割にとらわれずに、自分で選択し、行動することが大切だと思いますが、栗城さんが言われている無意識に持っている心の壁を取り払い、一歩踏み出す勇気に通じる部分があると思います。これを伝えるために大切だと思っていることや心がけていることは何ですか。

**A** 自分は登山家になりたかったわけではなかった。自分がやってみたくて、気になること、楽しいと思えることを選んでいく。日本はすごく恵まれていて、お金がなくても貧乏でもなんとか生きていける。他の国はそんなことはない。だから



どんどん失敗してもやりたいことをやっていくこと。日本は素敵な国だということに皆が気づけば、多少失敗しても踏み出せる人が増えていくのではないかと。

**Q** 栗城さんにとって、男性も女性も自分らしく生きるというのはどういうことですか?

**A** やりたいことは自分だけでは見つけることはできない。たくさんの人との出会いによってどんどん自分というものは変化していく。人に必要とされる人間になること。仕事でもボランティアでもやっていきたい。素直に生きることも、自分らしく生きることだと思っている。

